
幽霊列車・ネオファントム

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽霊列車・ネオフロントム

【コード】

N9964U

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

ピンチの時に駆けつける、幽霊列車のお話。

「おいおい勘弁してくれよ」

武田玄が音を上げた。さっきから獲物のハンマーを振り回しているが、あまり手ごたえを感じない。たかだか20体ほどなのに、当ても当たってもその数が減らない。

「くそ、龍斗、大牙、お前らでもあかんか!!」

「あつかん、こら斬れへんわ」

「たく、次々復活しよつてからに!!」

双子の一人 蒼崎龍斗は薙刀で間合いを取り、双子のもう一人 蒼崎大牙は2刀流で相手を崩していく。しかし、彼が最初の方でつぶした敵が既に立ち上がってきている様子がうかがえる。

彼ら三人が戦っているのはスケルトン20体。強い衝撃で簡単に崩れる反面、一定時間がたつと復活してまた活動し始めるという非常に厄介な妖怪である。にっちもさっちもいかない状況に、大牙が文句を言った。

「たく、骨ありすぎやろ、こいつら」

「ほんま頑丈やな……てか、骨しかないがや!!」

「あ、ほんまや」

……このような危機的状況においてもツッコミができるというのは関西人の性だろうか。ただでさえ敵をを倒せず焦りがある玄にとつて、このやり取りは余計なものだった。

「……漫才なら余所でやれ……オルア!!」

今まで横薙ぎにしていた玄が振り切らずにハンマーを打ち下ろし、スケルトンの一体を粉々に叩き割った。その後は横薙ぎで敵を吹き飛ばしていく。

「やべえな、あいつがキレよる」

「早くこいつら何とかせんと……」

崩しては復活、崩しては復活。その繰り返して動き回っていた龍

斗の足元でジャリツという音がした。足元に目を向けると、そこには粉々になった白骨の残骸。

「まさか、これ……おい、玄!!」

「ああ? 何や!!」

明らかにイラついている玄に向かって龍斗が叫ぶ。

「分かった!! こいつらの弱点!! 破壊や!!」

「破壊!? 叩き潰せつてか!!」

言下で突っ込んできたスケルトン。その頭上からハンマーを振り下ろす玄。

「けどよー、それ、玄一人の仕事になるよな?」

刀に薙刀では破壊は出来ない。それが出来るのは、ハンマーの玄だけである。玄の様子はというと、だいぶ体力を消耗しているようで、肩で息をしていた。これはまずい。龍斗がそう考えた時だった。「……え?」

カンカンカンカン……

どこからともなく踏切の音が聞こえてきた。それだけではない。ある方向から地面に2本の光が現れ、それはやがて横棒でつながれていく。龍斗が正体に気付いて叫んだ。

「線路から離れる!! あいつが来る!!」

全員が線路上から離れたその瞬間、汽笛の音と共にD 51を思わせる機関車が、ありえない速度で突進してきた。その速度たるや、音と同時に僅かに機関車の方が速いかという具合である。その線路上にいたスケルトンが見事に轢かれ、粉碎されていった。

いったん空へと上がっていった機関車が再び地面に戻ってきた。

今度は、玄の近くに停車した。何処にあるのかわからないが、スピーカーから声が流れる。

「ご利用ありがとうございます。こちらは、特別急行、『幽霊列車ネオファントム』、ご乗車の際は、足元と、存在の確信にご注

意くだったさい」

車掌独特のあの声を聞きながら、大牙、玄、龍斗は近くの車両にダッシュした。この列車には扉がない。幽霊列車の存在に対する信頼。それがなければこのネオファントムに乗車することはできない。乗り込んだ3人は2両目に集合した。そのタイミングを待っていたかのように車内アナウンスが入る。

「特別急行、『幽霊列車ネオファントム』、終着、スケルトン殲滅行き。車掌は私、くろがねまさゆき鉄真行でございます。それでは発車致します。急発進にご注意くださ〜い」

機体が揺れたと思ったたら、とんでもない重圧が体にかかった。そして時折、ガゴン、ガゴンと大きく揺れて体が跳ね上がる。

しばらくその状態が続いたが、急に普通並みの速度に落ちてしまった。玄が大声を出して聞く。

「どうした？ 真行！！」

「ご利用のお客様に申し上げます。ただ今ネオファントムは終着に向けて各駅停車しておりますが、いかんせんマナーの悪い連中でおまけに警戒して避けていくので困っております。つきましては外でお待ちの方々が整列するように上手くおびき出していただきたい。武田君は後始末うちゅうことで一つ、お願い申し上げます」

車掌口調が乱れ、途中に刑事が本庁に連絡を入れるときのような、乱雑な口調になっていた。それほど焦りがあるということだろう。

3人は即答した。

「了解」

一斉に飛び出して残りを確認する。すると、あちこちで粉々になった白の塊が目に見えた。幽霊列車の餌食となったスケルトンの成れの果てである。龍斗たちは改めて列車の威力を実感した。

「おらっよっよっ」

残っていたのは約8体。相手の攻撃をうまく避けながら、何とか

一か所に集めることに成功した。

「で？ この後は？」

玄の質問には誰も答えを持っていない。……ただ一人、鉄を除いては。

「それでは、乗客の皆様、50m以上全力ダッシュで逃げて下さい。光のレールが迫ってくるのを確認し、慌てて逃げる3人。スケルトンの注意もそちらへ移る。

「速度超過、ATS無効、極めつけの直角カーブ！！……それでは皆様、脱線事故にご注意くださあい！！」

そのアナウンス通り、スピードを出しすぎてカーブを曲がりきれなかった客車が脱線、横転し、集められたスケルトンに容赦なく襲いかかる。その下敷きになった骸骨は、骨が砕かれて灰へと変わっていった。……因みにこの急カーブによる脱線・横転攻撃は『尼崎プレス』という名前が付けられている。

これによって7体が一気に潰され、ギリギリ逃れた1体も玄に叩かれる運びとなった。

「幽霊列車ネオフロントム、終着、スケルトン殲滅です」

停車しているネオフロントムからアナウンスが響いた。因みに倒れた車両はネオフロントム自身の意志によって起き上がっている。

「アリガトな、鉄ちゃん」

玄がそう呼びかけた。鉄真行のニックネームが「鉄ちゃん」なのだ。運転席の真行は軽く笑っていたが、それに気づいたものはいなかっただろう。

「幽霊列車ネオフロントム、ご利用ありがとうございました。またのご利用お待ちしております」

そのアナウンスと共に幽霊列車は空へと消えていった。

「さって、俺らも帰るかな」

大牙が伸びをしながらそう言った。何十mか進んだところで玄が

声を上げた。

「……………あー!!」

「ん？ どうした？」

「よう考えたら、ネオファントムに家まで送ってもらった方が良かったんじゃない？」

「……………あー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964u/>

幽霊列車・ネオファントム

2011年7月19日03時22分発行